

2022年8月7日 午前礼拝
「福音の意味」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】

ガラテヤ 2:19~21

19 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。

20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によって生きているのです。

21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」

【説教要約】

今日見ていくのはパウロが書いたガラテヤ教会への手紙です。この手紙はパウロがなりふり構わずにガラテヤ教会に呼びかけた、叫びのような手紙です。

私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。

ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。

ガラテヤ 1:6-7

ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。

ガラテヤ 3:1

ガラテヤ教会ではとんでもないことが起ころうとしていました。パウロが建てたこの教会に、忍び寄る者たちがあつたのです。彼らは教会の基礎である福音をすり替えて、教会を別物にしようとしたのです。

ガラテヤ教会の人々は、自分が救われた福音ではないものを聞いて、騙されてしまったのです。それは、簡単に言えば「イエス様の十字架を信じるだけでは救われぬ。旧約聖書の律法を守ろうと努力して、初めてクリスチャンになる」ということでした。

パウロは、まるで自分の子どもが悪い大人に騙され、たぶらかされた親のように、何とか彼らを引き戻そうと手を伸ばします。しかし、騙されている子どもの方は、親であるパウロの方が間違っていると思われているので、パウロには冷たい視線で答えるだけなのです。そんな状態の中での言葉なので、この手紙は非常に戦闘的で、説得的な論調となっています。

パウロがこれほどの量の紙面を割いて彼らに思い出させたかったのは、福音そのものなのです。「福音」というと、耳にタコが出来る程聞いたものかもしれませんが、実はガラテヤ教会に起きた問題と同じことが、今日にも起こり得るのです。

それは、福音だけに立たなくなるという問題です。

福音とは何でしょうか。

「イエスが私の罪のために死なれ、葬られ、三日目によみがえられたこと」と聞きます。その通りです。

では、それは私たち一人一人に、いったいどのような意味があるのですか。今一度、信仰の最も大切な部分を皆で確認したいと思います。

①私は罪びとです

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。

私はキリストとともに十字架につけられました。

ガラテヤ 2 : 19 – 20a

「律法」という言葉が出てきます。それはご存知の通り旧約聖書に書かれている神の命令のことです。

「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」「殺してはならない」などの十戒が有名です。律法の総数は、ユダヤ教では613もあるらしいです。

ユダヤ人は、この律法を守ることこそ神に選ばれた民である証明、神に認められる手段だと思って、熱心に守っていました。今日もそうです。神様に認められるためのテストだと思って、頑張っているのです。

自分に価値を見出そうとするなら、誰かに誉められることが証拠になるのではありませんか。誉めてくれる人が自分にとって価値ある人物になればなるほど、その人に誉められる自分の価値も高くなるのです。

誰かに認められることで、「自分は生きていい」「誰かに必要とされている」「ここにいていいんだ」という実感と安心感を得るからです。

しかしここでパウロは、「律法によって律法に死にました」と語る。律法は、パウロにとって人生の生きがいでした。パウロは、自分で証言できるほどに、そんじょそこのユダヤ人よりも熱心に律法を守ろうとした人物でした。

以前ユダヤ教徒であったころの私の行動は、あなたがたがすでに聞いているところです。私は激しく神の教会を迫害し、これを滅ぼそうとしました。

また私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。

ガラテヤ 1 : 13 – 14

熱心に熱心に正しいことを追い求めた。それは、努力することによって神に認めてもらうためだった。「自分はこんなに律法に熱心だ」「こんなに律法を守っている。努力している」。だから自分は神様に認められるはずだ。これがパウロの生きがいでした。

しかし、彼はイエス・キリストを知った時、自分は神の前に誉められるような存在ではないことが分かってしまったのです。それどころか、たった一つの功績もなかったのだと言っているのです。それが「死」ということである。彼は、神の前にいる自分の罪に打ちのめされ

た。打ちのめされきって、自分の中には少しも良いところがない、生きているところはないと認めざるを得なかったのです。神様のテストを頑張っていたつもりが、0点の失格者だと認められたのです。

それはどのようにして起こったのでしょうか。「キリストとともに十字架につけられ」てでした。キリストが十字架で死んだとき、今までの「パウロ」という一人の人間の存在すべてが巻き込まれて、一緒に十字架についたのだと。そして、昔ついただけでなく、今もついているのだとパウロは語ります。

兄弟姉妹。自分が一つも神に誉められるような存在ではないと知っていますか。その絶望を味わったことがありますか。もし自分には少しでも認められるような点があると思っているとすれば、それはまだ自分の罪を知らないのです。

②イエス様は私のために死んでくださいました

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

ガラテヤ 2 : 20

十字架につけられて、キリストに出会うまでのパウロは死にました。だからパウロは、今も生きているこの肉体は、もう自分が生きているのではないと語ります。では今のパウロは何者なのでしょう。今までは、「神のテストに合格するために生きる者」でした。しかし今は、「キリストが内に生きておられる」パウロなのです。パウロは、無価値で失格者な自分を知ると同時に、無価値な自分のために神の御子が自分から人間の位にまでへりくだり、一方的に死んでくださったことを知ったのです。

人の愛は、自分にとって価値のあるものにしか向けられません。どんなにきれいごとを語っても、価値を見出せないものを愛することはできません。ユダヤ人であるパウロもそうでした。神は、価値のある自分を愛してくれると思っていたのです。しかし、本当は神に認められるどころか、神に敵対しているのだと分かりました。神のみこころである律法に叶う生き方などとてもできなかったのです。神様が自分を愛してくれる理由なんてありません。しかし神は愛してくださったのです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。

なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。

このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。

ローマ 6 : 6-11

私たちを愛してくださるキリストは、死んでしまった人間ではなく、よみがえられて今も生きて働かされている神です。無価値な私を愛してくださるキリストの愛を信じて受け入れるなら、神はその人とともに生きてくださいます。これが聖霊であり、約束なのです。ここに、信仰が必要なのです。

兄弟姉妹。キリストを信じている者は、これから神に認められるのではなく、すでに神に認められていると知っていますか。

パウロは、それが分かる前は自分の価値を努力で高めて、「これから」神に認められようとしていました。しかしパウロはイエス様に出会ったとき、自分の「認められようとする努力」が必要なく、失格者だけれどもその自分をイエス様が愛してくださったことを知りました。皆さんは、「合格者になる」ことから解放されていますか。自分が何者であっても、イエス様はいのちを捨てて愛し、よみがえってくださったのです。そのことを信じておられますか。

③恵みを無にしない

私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」

ガラテヤ 2 : 21

終わりにパウロは確信をもって述べます。これら自分に与えられたのは神の恵みなのだ。受ける資格のない者が与えられたものです。失格者なのに合格者として認められたのです。

恵みを無にしない、とはすなわち恵みに生き続けるということです。恵みに生き続けるためには逆戻りしてはなりません。パウロが、昔は自分の努力で認められようとしていたように、キリスト以外の価値を自分に見出してはならないのです。また、キリストだけでは不十分だと考えて、他の要素がないと認められないと考えてはいけません。それは受け入れたはずのキリストを、締め出す行為なのです。パウロは厳しい言葉で、「キリストの死が無意味になる」と言っています。

例えるなら、せっかく0点しか取れない自分を合格だと認めてくれたのに、「頑張れば自力で合格できるはずだ」と考えるようなものです。それは、自分のいのちを犠牲にして私たちを救ってくださったイエス様の十字架を、なかったことにする行為なのです。簡単なことです。キリストにだけ価値があるのです。そして、キリストに愛されていることにだけ、私たちの価値は存在するのです。

だからパウロはこう言います。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

ガラテヤ 6 : 14

兄弟姉妹。このシンプルで、絶対的な愛を信じておられますか。これだけで十分であることを味わっておられますか。

よく考えてみて欲しいのです。今、何のために生きていますか。「認められるため」ですか。それとも「認められたから」ですか。

もし誰かに認められるために生きているのなら、それは自分で自分を苦しめています。なぜなら、認められるまで心は満たされないからです。

そして、もう満たせる方がいるのに無視しているのです。イエス様はいのちを投げ出して、「わたしはあなたを愛している。あなたがどんなに罪びとであろうとも、わたしはあなたのために罰を受ける」と言ってくださっているのです。

もし、今日思い違いをしていることが示されたならば、それは神のあわれみです。今祈り、悔い改めて、もう一度キリストの愛の中にだけ生きていこうではありませんか。